

[28]

氏名	兵 純子 <small>ひょう じゅんこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第 49 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	慢性疼痛における心理面のアセスメントについて ー心理社会的側面におけるスクリーニングおよび 質問紙ツールの開発に向けての検討ー
論文審査委員	主 査 教 授 寺嶋 繁典 副 査 教 授 岡田 弘司 副 査 名 誉 教 授 高橋 依子 (大阪樟蔭女子大学)

論文内容の要旨

慢性疼痛によりペインクリニック等の医療機関を受診する患者は後を絶たない。慢性疼痛の一つである痛覚変調性疼痛は、器質的な疾患や原因が明確ではないにも関わらず持続する痛みであり、心理・社会的な背景が関与しているとされている。この種の疼痛では身体的苦痛に加えて、心理的ストレスが増幅されやすいことで QOL が低下し、結果的に日常生活に支障をきたしがちである。したがって痛みを訴える患者の治療では身体的原因の精査に加えて、病前性格、精神状態、社会環境などの心理・社会的側面のアセスメントを迅速に行い、必要に応じて早期に介入することが有効とされている。

現在、慢性疼痛患者の心理・社会的側面のアセスメントでは、数種類の質問紙や心理検査が使用されることから回答に時間を要し、このことが痛みを訴える患者の負担につながっている。臨床現場では、より負担の少ない有用なアセスメントツールの開発が喫緊の課題となっている。ただ、痛みに影響する心理・社会的要因についての見解は一定でなく、有用なアセスメントを行うためには、疼痛を訴える人々のどのような側面のアセスメントが有効かを明らかにする必要があるとしている。

以上の観点から、本論文に掲載された一連の研究は、①関連文献の論考を通じて慢性疼痛の心理・社会的側面のアセスメント等に関わる現状と課題を明らかにすること、②事例研究と調査研究により質・量の両面から慢性疼痛に関わる心理・社会的要因を明確にすること、③慢性疼痛に関わる心理・社会的側面のアセスメントに有用な尺度を検討することなどを目的に行われたものである。本論文は 3 部、7 章構成で作成されており、各章の要旨は以下の通りである。

第Ⅰ部・第1章では、最初に慢性疼痛の医学的な捉え方や定義を示し、アセスメントツールとして使用されてきた多数の質問紙や心理検査の特性を比較検討している。この結果として、慢性疼痛のアセスメントでは、患者の主観的な痛みの程度、心理状態やQOLに加えて、痛みへの考え方や捉え方などの認知・思考面の特徴を把握することの重要性を示している。また心理・社会的側面を網羅的に把握しようとして、多くの質問紙が使用され、このことが患者の大きな負担につながっているとの指摘をしている。慢性疼痛の心理支援の要となる、より負担の少ないアセスメントの方法を見出すための基礎研究と新たな質問紙の開発が求められるとしている。このように第1章では、一連の研究の問題意識や臨床上の研究意義などが示されている。

第Ⅱ部は第2章から第4章の三つの章から構成されている。第2章では医学的治療と並行して行われた心理療法により、痛みが変化した2事例の治療経過を検討している。両事例には抑圧や過剰適応の傾向が認められるとともに、愛着関係の課題やアレキシサイミア（失感情症）傾向が加わり慢性疼痛が持続しているとしている。これらの所見から慢性疼痛の患者の心理支援では、性格傾向や精神状態、及び家族関係などの生育環境の理解が重要であると述べている。また第3章では、喪失体験を有する慢性疼痛の2事例の治療経過を検討している。心理検査の結果や心理・社会的背景の聴取から、喪失体験が痛みの発症や慢性化に関与していることを示している。また2事例に共通する特徴として、不安傾向や強迫性思考、及び喪失の苦痛を表出せず感情を抑圧する思考などがみられ、これらの心理状態や感情が痛みとして表現されている可能性を示唆している。第2章と第3章では、痛みが難治化している患者の事例研究を通じて、慢性疼痛の持続に関与する心理・社会的要因について検討し、性格傾向、認知・思考、ストレスの状況、及び愛着関係を含む生育環境の評価が心理支援に重要であると結論づけている。

第4章では、質問紙やロールシャッハ・テストを用いて、健常者を対象に慢性疼痛を生じる可能性のある慢性疼痛予備群の心理的特徴を調査している。慢性疼痛予備群は質問紙により慢性疼痛の患者と類似した性格特徴を有しているが、慢性疼痛を発症していない健常者である。質問紙とロールシャッハ・テストの所見から、慢性疼痛予備群は慢性疼痛の患者と同様に身体感覚が過敏で身体的痛みが増幅しやすく、自己を否定的に眺めがちであり、結果的に身体的不調を自覚しやすいことを明らかにしている。ただし、慢性疼痛予備群には感情の表出を統制できる者が多く、この点で慢性疼痛の患者と異なるとしている。一方、慢性疼痛予備群は健常者に比して、自己肯定感が低く劣等感を抱きがちでストレスにさらされると不安を生じやすいなどの傾向が示唆されると述べている。慢性疼痛予備群の心身の状態を明らかにすることにより、慢性疼痛の発症のメカニズムの明確化や発症の予防につながる側面があることが示されている。本章の結果から、慢性疼痛患者の心理・社会的側面のアセスメントでは、これらの観点を考慮したアセスメントの方法を用いることが望ましいとしている。

第Ⅲ部・第5章では第2章と第3章の事例研究で示された、慢性疼痛と愛着関係を含む養育環境との関連性を検討する目的で実施された調査研究について述べられている。慢性疼痛の発症は若年層で難治化しやすく、成人後の発症には養育環境が影響するとされている。女子大学の学生を対象に、痛みと愛着関係を含む養育環境との関連について調査された結果、愛着不安の高い若年層の女性は対人不安や孤独を感じやすく、感情や思考を適

切に表出できずに身体化しやすいなどの見解を示している。特に複数箇所にあぶ痛みを有する場合は、愛着不安を抱いて生育したことで心理的分離が促進されず、情緒的欲求が十分に満たされなかった可能性があることや、抑圧された情緒的欲求が痛みとして表現されやすい傾向がみられるとしている。慢性疼痛の治療や心理支援を行う上で愛着関係を含む養育者との関係を理解することが重要であるとしている。

第Ⅳ部の第 6 章では慢性疼痛の心理・社会的側面のアセスメントに用いる尺度の開発を試みている。従前、臨床場面ではアセスメントのために複数の質問紙が使用され、痛みを抱える患者の負担となってきた。本研究では必要最小限の項目によるアセスメントの方法を見出すための調査研究が行われている。第 1 研究では一連の研究結果を手がかりにして、痛みの質と程度、認知・思考、心理状態や社会適応などを評価するための最小限の尺度を選定し、慢性疼痛予備群が含まれると考えられる健常者を対象に調査が行われている。使用された尺度のうちで、破局的思考尺度 (PCS) を除く身体状態尺度 (痛みの状態)、強迫性思考尺度、抑圧思考尺度、及び抑うつ・不安尺度、社会適応尺度の各尺度は、この目的のために新たに尺度構成されたものである。調査資料の分析から、痛みを評価する身体状態尺度と破局的思考尺度、強迫性思考尺度、抑圧思考尺度との間に関連が認められ、同様に身体状態尺度は抑うつ・不安尺度と社会適応尺度にも関連性を示した。また身体状態尺度の得点分布をもとに痛み高値群と痛みなし群の 2 群に分割して、認知・思考に関する 3 尺度と抑うつ・不安、社会適応の 2 尺度の平均得点を比較したところ、痛み高値群は痛みなし群に比べて、いずれの尺度においても高得点を示した。これらの結果から健常者群であっても痛みを自覚している者は、これまで指摘されてきた破局的思考だけでなく、強迫性思考や抑圧思考を用いやすく、また抑うつ・不安を抱きがちで社会適応も低下する傾向が示された。以上の点から、慢性疼痛のアセスメントでは、認知・思考の特徴や心理・社会適応状態を把握することが重要であると述べている。さらに第 2 研究では、本研究で使用または作成した尺度の臨床上の有用性を検討するために、各尺度を痛覚変調性疼痛の患者に適用している。これらの患者の症状や訴え等を事例ごとに分析・検討したところ、治療開始時には各尺度の得点が高く、治療が進むに連れて得点が低下し、各尺度の得点が患者の状態や治療の進捗を概ね反映していることから、各尺度の臨床場面における一定の有用性が示されている。

第Ⅴ部・第 7 章では一連の研究を総括し、研究の成果と課題について述べられている。成果としては、慢性疼痛の心理・社会的側面のアセスメントにおいて認知・思考や心理・社会適応状態の評価が重要であり、特に破局的思考に加えて強迫性思考や抑圧思考の評価がアセスメントの精度を高める可能性が示された点である。一方、課題としては、使用または作成した尺度の有用性の検証が事例研究に留まっている点で、今後、臨床群を含めた量的研究が必要であるとしている。本研究の成果を直ちに臨床場面へ応用することはできないとしながらも、痛みの心理的背景に認知・思考の関与が示唆されたことは、このプロセスの理解を促すような心理教育が治療意欲の向上や難治化の予防につながることを示すものであると最後に記されている。

論文審査結果の要旨

本論文は、慢性疼痛の心理・社会的側面のアセスメントに関する一連の研究から構成されている。冒頭では、国内外の文献研究から慢性疼痛に関するアセスメントの現状と課題を明確にしている。また次の慢性疼痛の患者を対象にした二つの事例研究では、慢性疼痛患者の心理・社会的側面の心理支援、特にアセスメントの方法における臨床上の課題を明らかにしている。すなわち、従前のアセスメントの場面では複数の質問紙や心理検査が使用されるために、痛みを抱える患者にとっての負担が大きくなりがちであり、この改善が急務であるとしている。以上の明確な問題意識のもとで、アセスメントの新たな方法の開発に向けた研究が段階的に実施されている。結果的に認知・思考、及び不安・抑うつ、社会適応の状態の評価がアセスメントの要になることを示している。論文最後の研究では、心理・社会的側面を評価する、負担のより少ない質問紙を考案し、各尺度が慢性疼痛患者の症状や治療の進展を適切に反映している可能性を示唆している。

本論文で開発されたアセスメントの方法を臨床現場に適用するためには、さらなる検証を経る必要がある。しかし本研究の成果は今後、患者の負担軽減や疼痛の慢性化予防などに寄与する可能性が大いに期待される。また慢性疼痛を有する者の心理・社会的側面の理解において、認知・思考や愛着関係が重要であるという見解は、カウンセリングの新たな方向性を検討するにあたり有用な情報であり、疼痛慢性化の予防的観点からの心理教育への活用も期待される。

以下、本研究科が定める「博士論文審査基準（課程博士）」にしたがって、審査委員の見解を記述する。

(1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

慢性疼痛患者の治療では心理・社会的側面の評価のために、複数の質問紙や心理検査が使用されてきた。このことが痛みを抱える患者にとってはかなりの負担となっており、アセスメントの場面における負担軽減が喫緊の課題となっている。慢性疼痛の心理支援に長年にわたり携わってきた論文提出者は、この課題解決のための糸口を見出すという明確な目的のもとで一連の研究を実施している。よって問題意識が明確で社会的要請にも合致した適切な課題設定であると判断される。

(2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

本論文の巻末に示された通り、国内外の関連文献・資料を数多く収集し、各所に適切に引用しながら論を展開している。特に第1章では多くの先行研究の論考を通じて、慢性疼痛とその心理・社会的側面のアセスメントに関する現状と課題を明らかにしている。また口頭試問の質疑応答からみても、国内外の先行研究に関する知見を豊富に有していることは明らかである。

(3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

研究全体として、研究課題・目的に合致した方法論を適切に適用している。第1章では慢性疼痛のアセスメントに関わる現状と課題を明確にするという目的を、文献研究により達成している。第2章以下では、心理・社会的側面のアセスメントや心理支援を効果的に行うための要因を分析するにあたり、事例研究と調査研究を用いた、質・量の両面からの研究方法を取り入れており、研究目的と方法論との適合性は高い。なお、構成された尺度の有用性の検証が事例研究に基づいており、今後、量的研究方法などを適用した検証が求められる。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

本論文では慢性疼痛の心理・社会的背景の同定とそのアセスメントという一貫した研究課題のもとで、各研究の成果が段階的・体系的に記述されている。最初に臨床上の研究意義・目的を明確にし、この目的のもとで実施された研究の成果が次の研究に引き継がれる形で論理が明快に展開されている。以上の点からみて、論文全体の整合性が高く説得性の良好な論文構成となっている。

(5) 全体を通して学術的な独創性が認められること

慢性疼痛患者への心理支援では、さまざまなアプローチが取り入れられ一定の成果を示してきた。ただし、アセスメントの場面における患者の負担軽減は今なお課題となっている。慢性疼痛患者の心理支援に携わってきた論文提出者は、これらの課題に対して質・量の両面からの研究を適用して、実証的な観点から改めて慢性疼痛患者への心理支援のあり方を示すとともに、患者の負担軽減につながる可能性のある新たなアセスメントツールの考案に至っている。以上の点からみて、特に医学や臨床心理学の分野において独創性の高い学術的成果を示している。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

一連の研究成果は、著書、関連学会の学会誌、大学の紀要、並びに医学系関連学会の大会等で広く公表されており、国内学会への貢献度はきわめて高い。ただし、海外の学会等への公表は未だ途上であり、今後、海外への成果の発信が期待される。なお、本研究の成果を臨床現場に応用するためには、さらなる検証を経る必要がある。しかし慢性疼痛に関与する心理・社会的側面の評価において、患者の負担軽減につながる可能性のあるアセスメントツールを考案したこと、及び認知・思考や愛着関係の理解が重要であるという見解を示したことは、慢性疼痛に悩む患者への心理支援の一助になることは確かである。この点からみても、社会的貢献度の高い研究である。

以上のとおり、本論文には今後の発展に期待される部分がみられるものの、心理学研究科博士論文審査基準を満たしていると判断される。したがって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。